おくのほそ道『立石寺（閑かさや）』定期テスト対策問題｜現代語訳・俳句・文法の頻出設問と解答　解答・解説

問1

(1)「いう」

(2)終止形＝「あり」、品詞＝動詞（ラ行変格活用「あり」）。

問2

（この寺は）慈覚大師が（最初に）開いた寺であって。（「開基」＝寺を開き建てること、また開いた人。「にして」＝〜であって。）

問3

(1)「殊に」＝とりわけ・特に。

(2)「清閑」＝清らかでもの静かなこと。俗世を離れた静けさ。

(3)断定の助動詞「なり」の終止形。（「清閑の地である」と言い切っている。）

問4

(1)適当・当然（〜するのがよい、ぜひ見るべきだ）の意味。

(2)「（立石寺は）ぜひ一度見ておくのがよい（という評判だ）」という内容。人々が「見ておいたほうがよい」とすすめたということ。

問5

(1)ウ（〜という事情・旨）

(2)ア（打消）

問6

立石寺は「ぜひ一見すべきだ」と人々がすすめたため、いったん通り過ぎた尾花沢から引き返してまで訪れた。それほど見る価値のある名所だと評判だったから。

問7

現代語訳＝「日はまだ暮れていない。」

役割＝まだ明るいうちに山上の堂まで登れることを示し、これから山を登って参拝するという場面へ自然につなげている（時間の経過・状況を読者に伝える）。

問8

（まず）麓の宿坊に宿を（とって荷物を）預けておいて、（それから）山の上のお堂へと登る。

問9

大きな岩の上にさらに岩が重なり合って一つの山となっている、けわしく雄大な情景。（岩石が積み重なってできた山であることを表す。）

問10

(1)「としふり」

(2)松や檜（ひのき）などの木が長い年月を経て古び、土や石も古色を帯びていることから、人の手の加わらない、長い時を経たもの静かで荘厳な場所であること。

問11

(1)形容動詞「滑らかなり」（ナリ活用）の連用形。※「滑らかに」の「に」が連用形の活用語尾。

(2)長い年月のあいだ人があまり踏み入らず、土や石の上に苔がむして滑らかになるほど、ひっそりと静かな状態が長く続いている様子。（古びて、ものさびた雰囲気であること。）

問12

お堂の扉はどれも閉ざされ、物音一つ聞こえない、という極限の静けさを強調している。この徹底した静寂の描写があるからこそ、続く発句「閑さや岩にしみ入る蝉の声」の「閑さ（静けさ）」がいっそう生き、蝉の声がかえって静寂を際立たせる効果が生まれている。

問13

（川の）岸をめぐり、岩をはうようにしてよじ登って。（＝けわしい道を、岩につかまるようにして進んで。）

問14

「拝す」（サ行変格活用）。

問15

(1)「佳景」＝すばらしい景色・美しい眺め。

(2)「寂寞」＝ひっそりとしてもの静かなさま。

(3)（その美しい景色のなかで）心が澄んでゆくとだけ感じられる。（ほかには何も思わず、ただ心が澄んでいくのを感じる、という意味。）

問16

(1)季語＝「蝉（蝉の声）」、季節＝夏。

(2)切れ字＝「や」。

(3)初句「閑さや」で大きく句が切れ、作者の感動（静けさへの深い思い）を強調するとともに、そのあとの情景へと余韻をもってつなげる働きをしている。

(4)本来は耳で聞く「蝉の声」（聴覚）を、「岩にしみ入る」と、まるで固い岩の中へ音が染み込んでいくかのように表現している。聴覚を視覚的・触覚的にとらえ直す（共感覚的な）工夫によって、かえってあたりの深い静寂が際立っている。

(5)イ

問17

「静けさ」を表す部分＝「物の音聞こえず」（または「佳景寂寞として」「閑さや」）。

「音」を表す部分＝「蝉の声」。

※静寂のなかにただ蝉の声だけが響くという対照によって、いっそう深い静けさが表現されている。

問18

作者＝松尾芭蕉。ジャンル＝俳諧（はいかい。発句・俳句）。

問19

俳諧紀行文（紀行文）。

問20

エ（江戸時代）

問21

イ（東北・北陸地方）

※『おくのほそ道』は、芭蕉が弟子の曾良（そら）を伴い、江戸から東北・北陸をめぐって大垣に至るまでの旅をつづったもの。

問22

（例）あたりが徹底して静まり返るなか、わずかな蝉の声がかえって静寂を深め、その清らかな静けさのなかで作者自身の心も澄んでいくということ。（静寂と、それによって澄んでいく心の境地。）